

### III 結果の概要

#### 1 発育状態

##### (1) 身長

- ① 令和元年度の男子の身長の平均値は、5歳、9歳及び13歳から16歳を除く各年齢で前年度の同年齢より高くなっている。女子の身長は、5歳、7歳から9歳、11歳、12歳及び14歳を除く各年齢で前年度の同年齢より高くなっている。
- ② 令和元年度の身長を親の世代（30年前の平成元年度の数値）と比較すると、男子は5歳、6歳及び8歳を除く各年齢で、女子は5歳から9歳を除く各年齢で親の世代より高くなっている。最も差がある年齢は、男子は12歳で1.2cm親の世代より高く、女子は7歳で1.0cm親の世代より低くなっている。
- ③ 令和元年度の身長を全国平均値と比較すると、男女ともすべての年齢で全国平均値より高くなっている。最も差がある年齢は、男子は17歳で1.0cm、女子は13歳及び15歳で0.8cm全国平均値より高くなっている。

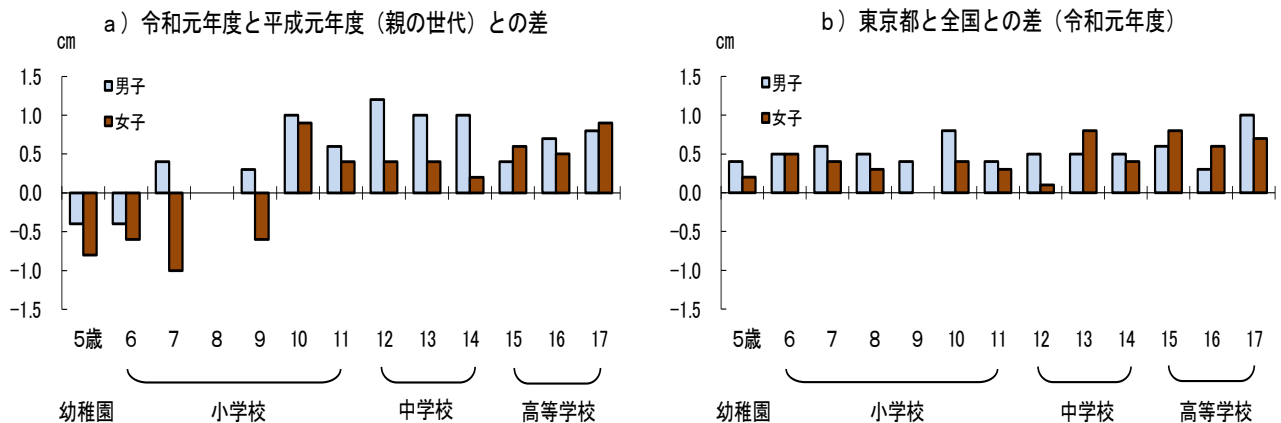
（表1、図1、統計表第1表、第2-1表、第2-2表）

表1 年齢別身長の平均値

（単位：cm）

区分	男子						女子								
	令和元年度 A	平成30年度 B	差 A-B	平成元年度 (親の世代) C	差 A-C	令和元年度 全国 D	差 A-D	令和元年度 E	平成30年度 F	差 E-F	平成元年度 (親の世代) G	差 E-G	令和元年度 全国 H	差 E-H	
幼稚園	5歳	110.7	110.8	△ 0.1	111.1	△ 0.4	110.3	0.4	109.6	109.7	△ 0.1	110.4	△ 0.8	109.4	0.2
	6歳	117.0	116.7	0.3	117.4	△ 0.4	116.5	0.5	116.1	115.9	0.2	116.7	△ 0.6	115.6	0.5
小学校	7歳	123.2	123.0	0.2	122.8	0.4	122.6	0.6	121.8	121.9	△ 0.1	122.8	△ 1.0	121.4	0.4
	8歳	128.6	128.3	0.3	128.6	0.0	128.1	0.5	127.6	127.7	△ 0.1	127.6	0.0	127.3	0.3
	9歳	133.9	134.4	△ 0.5	133.6	0.3	133.5	0.4	133.4	133.8	△ 0.4	134.0	△ 0.6	133.4	0.0
	10歳	139.8	139.0	0.8	138.8	1.0	139.0	0.8	140.6	140.4	0.2	139.7	0.9	140.2	0.4
	11歳	145.6	145.5	0.1	145.0	0.6	145.2	0.4	146.9	147.7	△ 0.8	146.5	0.4	146.6	0.3
中学校	12歳	153.3	153.0	0.3	152.1	1.2	152.8	0.5	152.0	152.5	△ 0.5	151.6	0.4	151.9	0.1
	13歳	160.5	160.5	0.0	159.5	1.0	160.0	0.5	155.6	155.5	0.1	155.2	0.4	154.8	0.8
	14歳	165.9	166.0	△ 0.1	164.9	1.0	165.4	0.5	156.9	157.5	△ 0.6	156.7	0.2	156.5	0.4
高等学校	15歳	168.9	168.9	0.0	168.5	0.4	168.3	0.6	158.0	157.8	0.2	157.4	0.6	157.2	0.8
	16歳	170.2	170.4	△ 0.2	169.5	0.7	169.9	0.3	158.3	157.7	0.6	157.8	0.5	157.7	0.6
	17歳	171.6	171.1	0.5	170.8	0.8	170.6	1.0	158.6	158.2	0.4	157.7	0.9	157.9	0.7

図1 年齢別身長の平均値の差



注) 身長の差は、都の令和元年度平均値から平成元年度（親の世代）平均値または令和元年度全国平均値をそれぞれ引いたものである。

④ 平成13年度生まれ（令和元年度17歳）の年間発育量をみると、男子は11歳時に最大の発育量を示し、女子は10歳時に最大の発育量を示している。最大の発育量を示す年齢時は、女子が男子に比べ1歳早くなっている。

この発育量を親の世代（昭和46年度生まれ・平成元年度17歳）と比較すると、発育量が最大となる年齢時は男子が親の世代より1歳早く、女子は親の世代と同じとなっており、男子では5歳から11歳、15歳及び16歳の各歳時で、女子では、5歳、8歳、13歳及び16歳の各歳時で年間発育量が親の世代を上回っている。

（表2、図2、統計表第1表、第2-1表、第2-2表）

表2 平成13年度生まれと昭和46年度生まれの年間発育量の比較（身長）

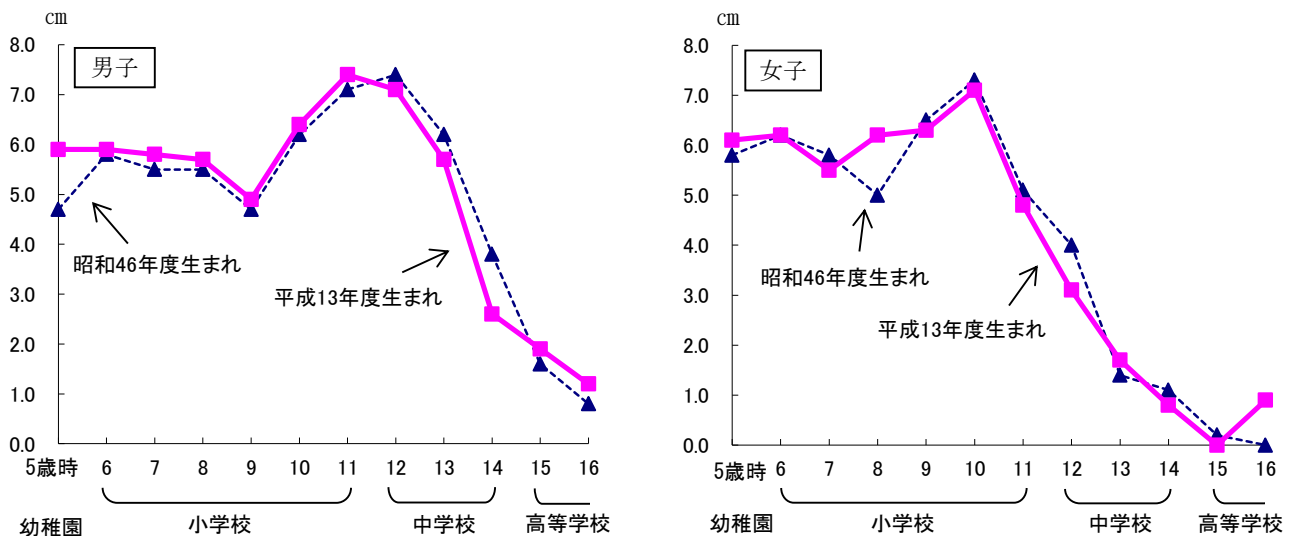
（単位：cm）

区分	男子		女子		
	平成13年度生まれ （令和元年度17歳）	昭和46年度生まれ （親の世代の17歳）	平成13年度生まれ （令和元年度17歳）	昭和46年度生まれ （親の世代の17歳）	
幼稚園	5歳時	5.9	4.7	6.1	5.8
小学校	6歳時	5.9	5.8	6.2	6.2
	7歳時	5.8	5.5	5.5	5.8
	8歳時	5.7	5.5	6.2	5.0
	9歳時	4.9	4.7	6.3	6.5
	10歳時	6.4	6.2	7.1	7.3
	11歳時	7.4	7.1	4.8	5.1
中学校	12歳時	7.1	7.4	3.1	4.0
	13歳時	5.7	6.2	1.7	1.4
	14歳時	2.6	3.8	0.8	1.1
高等学校	15歳時	1.9	1.6	0.0	0.2
	16歳時	1.2	0.8	0.9	0.0
総発育量	60.5	59.3	48.7	48.4	

注1) 年間発育量とは、例えば、平成13年度生まれ（令和元年度17歳）の「5歳時」の年間発育量を算出する場合、平成20年度調査6歳の者の身長から平成19年度調査5歳の者の身長を引いた数値である。なお、標本調査のため各歳時の調査対象者は異なる。

2) 網掛けの数値は、5～16歳時のうち最大の年間発育量を示す。

図2 平成13年度生まれと昭和46年度生まれの年間発育量の比較（身長）



## (2) 体 重

- ① 令和元年度の男子の体重の平均値は、7歳、15歳及び16歳の各年齢で前年度の同年齢より軽くなっている。女子の体重は、7歳、9歳、11歳から13歳及び17歳の各年齢で前年度の同年齢より軽くなっている。
- ② 令和元年度の体重を親の世代（30年前の平成元年度の数値）と比較すると、男子は7歳、10歳、11歳、13歳及び17歳を除く各年齢で親の世代より軽くなっており、女子は10歳、14歳、16歳及び17歳を除く各年齢で親の世代より軽くなっている。最も差がある年齢は、男子は15歳で2.5kg親の世代より軽くなっており、女子は7歳及び9歳で0.9kg親の世代より軽く、16歳で0.9kg親の世代より重くなっている。
- ③ 令和元年度の体重を全国平均値と比較すると、男子は9歳、12歳及び15歳から17歳の各年齢で、女子は7歳、9歳及び11歳から17歳の各年齢で全国平均値より軽くなっている。最も差がある年齢は、男子は15歳で1.1kg、女子は12歳で0.6kg全国平均値より軽くなっている。

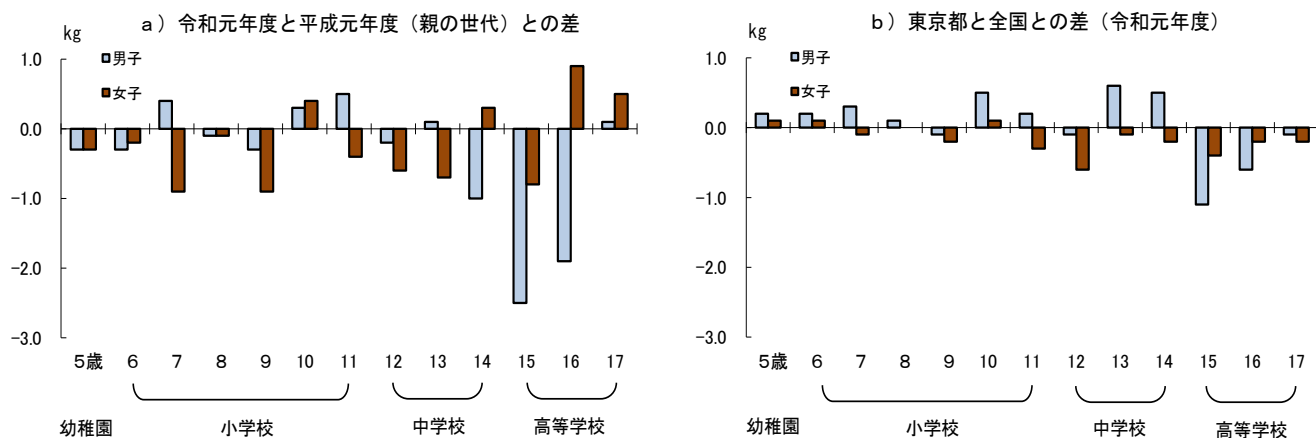
(表3、図3、統計表第1表、第3-1表、第3-2表)

表3 年齢別体重の平均値

(単位:kg)

区 分	男 子							女 子							
	令和元年度 A	平成30年度 B	差 A-B	平成元年度 (親の世代) C	差 A-C	令和元年度 全国 D	差 A-D	令和元年度 E	平成30年度 F	差 E-F	平成元年度 (親の世代) G	差 E-G	令和元年度 全国 H	差 E-H	
幼稚園	5歳	19.1	19.1	0.0	19.4	△ 0.3	18.9	0.2	18.7	18.7	0.0	19.0	△ 0.3	18.6	0.1
小学校	6歳	21.6	21.3	0.3	21.9	△ 0.3	21.4	0.2	21.0	20.9	0.1	21.2	△ 0.2	20.9	0.1
	7歳	24.5	24.6	△ 0.1	24.1	0.4	24.2	0.3	23.4	23.6	△ 0.2	24.3	△ 0.9	23.5	△ 0.1
	8歳	27.4	27.4	0.0	27.5	△ 0.1	27.3	0.1	26.5	26.2	0.3	26.6	△ 0.1	26.5	0.0
	9歳	30.6	30.6	0.0	30.9	△ 0.3	30.7	△ 0.1	29.8	30.1	△ 0.3	30.7	△ 0.9	30.0	△ 0.2
	10歳	34.9	33.9	1.0	34.6	0.3	34.4	0.5	34.3	34.3	0.0	33.9	0.4	34.2	0.1
中学校	11歳	38.9	38.4	0.5	38.4	0.5	38.7	0.2	38.7	39.4	△ 0.7	39.1	△ 0.4	39.0	△ 0.3
	12歳	44.1	43.8	0.3	44.3	△ 0.2	44.2	△ 0.1	43.2	43.7	△ 0.5	43.8	△ 0.6	43.8	△ 0.6
	13歳	49.8	48.9	0.9	49.7	0.1	49.2	0.6	47.2	47.3	△ 0.1	47.9	△ 0.7	47.3	△ 0.1
高等学校	14歳	54.6	54.2	0.4	55.6	△ 1.0	54.1	0.5	49.9	49.4	0.5	49.6	0.3	50.1	△ 0.2
	15歳	57.7	57.9	△ 0.2	60.2	△ 2.5	58.8	△ 1.1	51.3	51.0	0.3	52.1	△ 0.8	51.7	△ 0.4
	16歳	60.1	60.8	△ 0.7	62.0	△ 1.9	60.7	△ 0.6	52.5	51.4	1.1	51.6	0.9	52.7	△ 0.2
	17歳	62.4	62.0	0.4	62.3	0.1	62.5	△ 0.1	52.8	53.0	△ 0.2	52.3	0.5	53.0	△ 0.2

図3 年齢別体重の平均値の差



注) 体重の差は、都の令和元年度平均値から平成元年度（親の世代）平均値または令和元年度全国平均値をそれぞれ引いたものである。

④ 平成13年度生まれ（令和元年度17歳）の年間発育量をみると、男子は13歳時に最大の発育量を示し、女子は10歳時に最大の発育量を示している。

この発育量を親の世代（昭和46年度生まれ・平成元年度17歳）と比較すると、最大の発育量を示す年齢時は男女ともに親の世代と同じであり、男子では5歳、8歳、9歳、14歳及び16歳の各歳時で、女子では5歳、8歳、9歳、14歳及び16歳の各歳時で親の世代を上回っている。

（表4、図4、統計表第1表、第3-1表、第3-2表）

表4 平成13年度生まれと昭和46年度生まれの年間発育量の比較（体重）

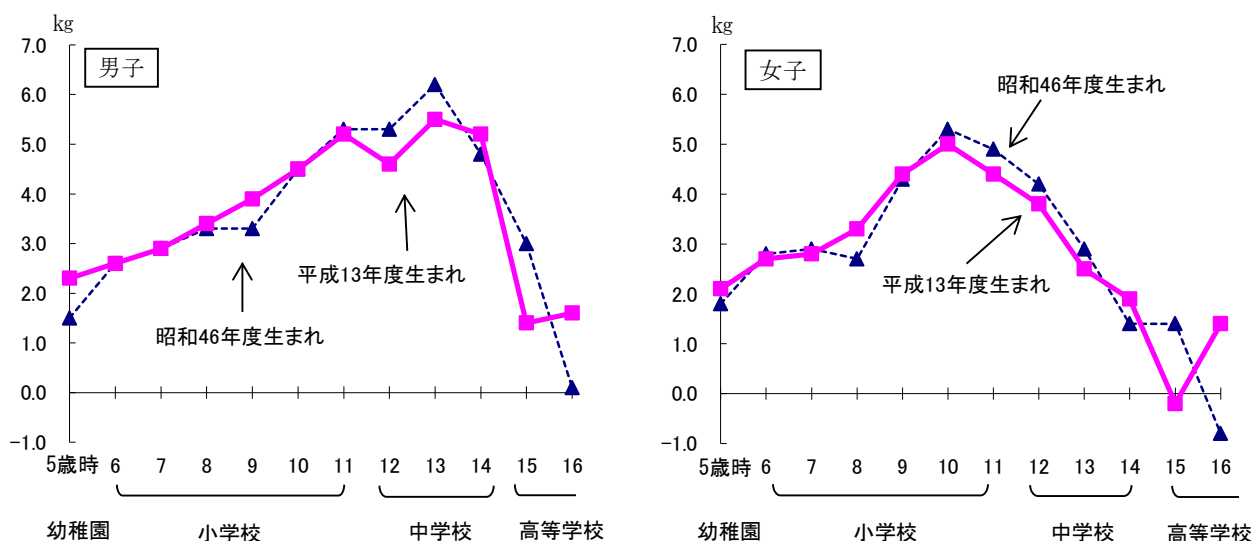
（単位：kg）

区分	男子		女子		
	平成13年度生まれ （令和元年度17歳）	昭和46年度生まれ （親の世代の17歳）	平成13年度生まれ （令和元年度17歳）	昭和46年度生まれ （親の世代の17歳）	
幼稚園 5歳時	2.3	1.5	2.1	1.8	
小学校	6歳時	2.6	2.6	2.7	2.8
	7歳時	2.9	2.9	2.8	2.9
	8歳時	3.4	3.3	3.3	2.7
	9歳時	3.9	3.3	4.4	4.3
	10歳時	4.5	4.5	5.0	5.3
中学校	11歳時	5.2	5.3	4.4	4.9
	12歳時	4.6	5.3	3.8	4.2
	13歳時	5.5	6.2	2.5	2.9
高等学校	14歳時	5.2	4.8	1.9	1.4
	15歳時	1.4	3.0	△ 0.2	1.4
	16歳時	1.6	0.1	1.4	△ 0.8
総発育量	43.1	42.8	34.1	33.8	

注1) 年間発育量とは、例えば、平成13年度生まれ（令和元年度17歳）の「5歳時」の年間発育量を算出する場合、平成20年度調査6歳の者の体重から平成19年度調査5歳の者の体重を引いた数値である。なお、標本調査のため各歳時の調査対象者は異なる。

2) 網掛けの数値は、5～16歳時のうち最大の年間発育量を示す。

図4 平成13年度生まれと昭和46年度生まれの年間発育量の比較（体重）



## 2 健康状態

### (1) 疾病・異常の被患率等の状況

学校種別に疾病・異常の被患率等をみると、全ての学校種において「むし歯（う歯）」のある者の割合が20%を超えている。

また、「裸眼視力1.0未満」の者の割合は、小学校において30%を、中学校及び高等学校において60%を超えており、「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合は、小学校、中学校及び高等学校において10%を超えている。

（表5、統計表第4-1表）

表5 学校種別疾病・異常の被患率等

区分(%)	幼稚園(5歳)	小学校(6～11歳)	中学校(12～14歳)	高等学校(15～17歳)	
90以上					
80以上～90未満					
70～80					
60～70			裸眼視力1.0未満 67.7	裸眼視力1.0未満 63.2	
50～60					
40～50				むし歯(う歯) 42.6	
30～40		むし歯(う歯) 39.4 裸眼視力1.0未満 38.7			
20～30	むし歯(う歯) 26.2		むし歯(う歯) 29.9		
10～20		鼻・副鼻腔疾患 13.0	鼻・副鼻腔疾患 11.2	鼻・副鼻腔疾患 11.6	
1～10	8～10	耳疾患 8.3			
	6～8	眼の疾病・異常 7.3 歯・口腔のその他の疾病・異常 6.3		蛋白検出の者 6.9	
	4～6		歯列・咬合 5.6 耳疾患 5.5 眼の疾病・異常 5.2 歯垢の状態 4.3	歯垢の状態 4.6 歯肉の状態 4.4 歯列・咬合 4.1	
	2～4	歯列・咬合 3.8 アトピー性皮膚炎 2.2	歯列・咬合 3.9 アトピー性皮膚炎 3.4 ぜん息 3.4 歯垢の状態 2.9	歯肉の状態 3.3 ぜん息 2.9 アトピー性皮膚炎 2.5 心電図異常 2.5 蛋白検出の者 2.5	耳疾患 3.7 眼の疾病・異常 3.5 心電図異常 3.2 せき柱・胸部・四肢の状態 2.6 アトピー性皮膚炎 2.1
	1～2	歯・口腔のその他の疾病・異常 1.7 その他の皮膚疾患 1.4 蛋白検出の者 1.2 口腔咽喉頭疾患・異常 1.1 ぜん息 1.1	心電図異常 1.3 歯肉の状態 1.2 栄養状態 1.2	歯・口腔のその他の疾病・異常 1.8 せき柱・胸部・四肢の状態 1.7	ぜん息 1.6 歯・口腔のその他の疾病・異常 1.5 顎関節 1.4 心臓の疾病・異常 1.0
0.1～1	0.5～1	眼の疾病・異常 0.6 耳疾患 0.6 歯垢の状態 0.6 鼻・副鼻腔疾患 0.5	その他の皮膚疾患 0.9 心臓の疾病・異常 0.9 蛋白検出の者 0.7 せき柱・胸部・四肢の状態 0.6 口腔咽喉頭疾患・異常 0.5	栄養状態 0.6 心臓の疾病・異常 0.6 口腔咽喉頭疾患・異常 0.5	栄養状態 0.9
	0.1～0.5	心臓の疾病・異常 0.3 言語障害 0.3 歯肉の状態 0.2	難聴 0.4 言語障害 0.4 腎臓疾患 0.3 尿糖検出の者 0.1	その他の皮膚疾患 0.4 難聴 0.3 顎関節 0.2 腎臓疾患 0.2 尿糖検出の者 0.1 言語障害 0.1	口腔咽喉頭疾患・異常 0.4 難聴 0.3 その他の皮膚疾患 0.3 尿糖検出の者 0.2 腎臓疾患 0.2
0.1未満	顎関節 0.0 せき柱・胸部・四肢の状態 0.0 腎臓疾患 0.0	顎関節 0.0		言語障害 0.0	

注1) 「口腔咽喉頭疾患・異常」とは、アデノイド、扁桃肥大、咽頭炎、喉頭炎、扁桃炎、音声言語異常のある者等である。

2) 「歯・口腔のその他の疾病・異常」とは、口角炎、口唇炎、口内炎、唇裂、口蓋裂、舌小帯異常、唾石、癒合歯、要注意乳歯等のある者等である。

3) 「その他の皮膚疾患」とは、伝染性皮膚疾患、毛髪疾患等、アトピー性皮膚炎以外の皮膚疾患と判定された者である。

4) 「心電図異常」とは、心電図検査の結果、異常と判定された者である。

5) 「蛋白検出の者」とは、尿検査のうち、蛋白第1次検査の結果、尿中に蛋白が検出(陽性(+)以上)又は擬陽性(±)と判定された者である。

6) 「尿糖検出の者」とは、尿検査のうち、糖第1次検査の結果、尿中に糖が検出(陽性(+)以上)と判定された者である。

7) 「難聴」については、6歳から8歳、10歳、12歳、14歳、15歳及び17歳、「結核」については、6歳から15歳、「心電図異常」については、6歳、12歳及び15歳、

「尿糖検出の者」については、6歳から17歳のみ実施している。

8) 疾病・異常被患率等の標準誤差が5以上、受検者数が100人(5歳は50人)未満、回答校が1校以下又は疾病・異常被患率が100.0%の場合、統計数値を公表しない。

## (2) 主な疾病・異常の被患率

### ① むし歯（う歯）

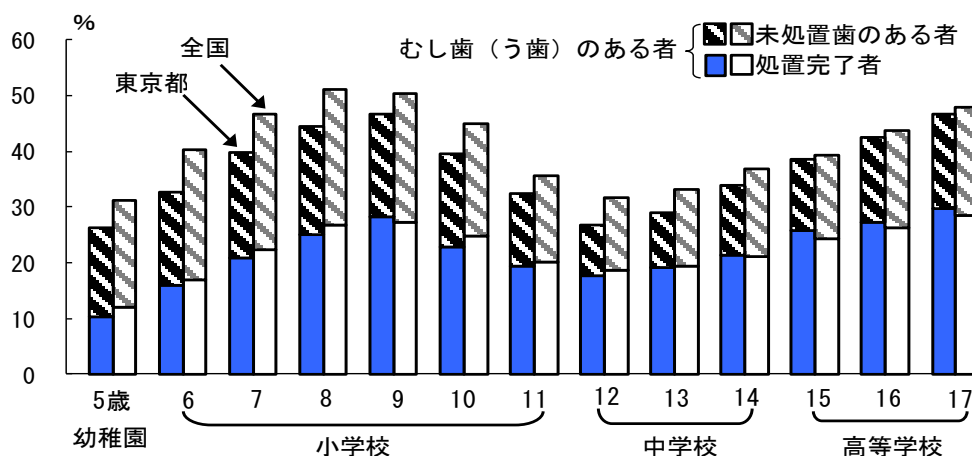
ア 年齢別に「むし歯（う歯）」のある者の割合をみると、5歳から9歳までは年齢とともに上昇し、10歳から12歳までは低下している。その後、13歳以降は上昇している。「むし歯（う歯）」のある者の割合が最も高い年齢は、9歳及び17歳で46.8%となっている。

また、「処置完了者」の割合は、5歳及び6歳を除く各年齢で「未処置歯のある者」の割合を上回っている。

イ 全国値と比較すると、すべての年齢で「むし歯（う歯）」のある者の割合は、全国値より低くなっている。全国値と最も差がある年齢は、6歳で7.5ポイント全国値より低くなっている。

(図5、統計表第4-1表、参考表)

図5 むし歯(う歯)のある者の割合の比較



注) むし歯(う歯)のある者=処置完了者+未処置歯のある者

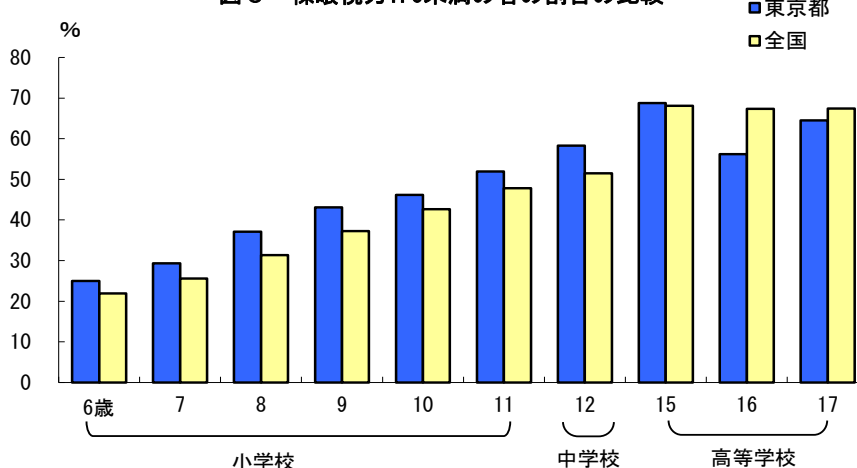
### ② 裸眼視力

ア 6歳から17歳までの各年齢別に「裸眼視力1.0未満」の者の割合をみると、6歳から12歳までは年齢とともに上昇傾向になっている。「裸眼視力1.0未満」の者の割合が最も高い年齢は、15歳で68.8%となっている。

イ 全国値と比較すると、6歳から12歳及び15歳で「裸眼視力1.0未満」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、16歳で11.2ポイント全国値より低くなっている。

(図6、統計表第4-1表、参考表)

図6 裸眼視力1.0未満の者の割合の比較



注) 幼稚園児(5歳)及び中学校(13歳、14歳)の「裸眼視力1.0未満」については、疾病・異常被患率等の標準誤差が5以上、受検者数が100人(5歳は50人)未満、回答校が1校以下又は疾病・異常被患率が100.0%のため、統計数値を公表しない。

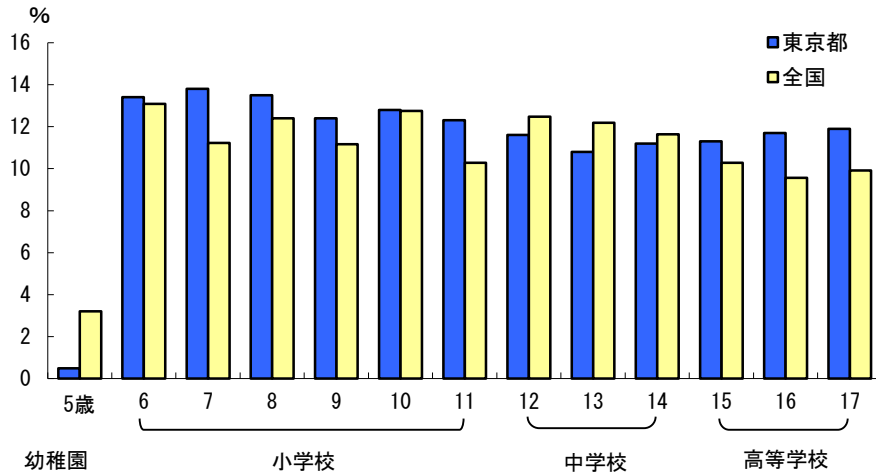
### ③ 鼻・副鼻腔疾患

ア 年齢別に「鼻・副鼻腔疾患」（蓄膿症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合をみると、5歳を除く各年齢で10%を超えている。「鼻・副鼻腔疾患」の者の割合が最も高い年齢は、7歳で13.8%となっている。

イ 全国値と比較すると、5歳、及び12歳から14歳を除く各年齢で「鼻・副鼻腔疾患」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、5歳で2.7ポイント全国値より低くなっている。

(図7、統計表第4-1表、参考表)

図7 鼻・副鼻腔疾患の者の割合の比較

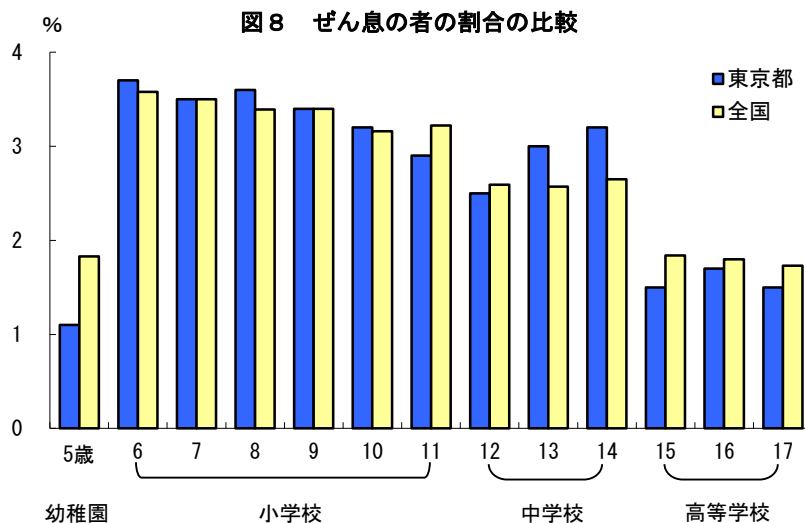


### ④ ぜん息

ア 年齢別に「ぜん息」の者の割合をみると、5歳及び15歳から17歳を除く各年齢で2%を超えている。「ぜん息」の者の割合が最も高い年齢は、6歳で3.7%となっている。

イ 全国値と比較すると、6歳、8歳、10歳、13歳及び14歳の各年齢で「ぜん息」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、5歳で0.7ポイント全国値より低くなっている。

(図8、統計表第4-1表、参考表)



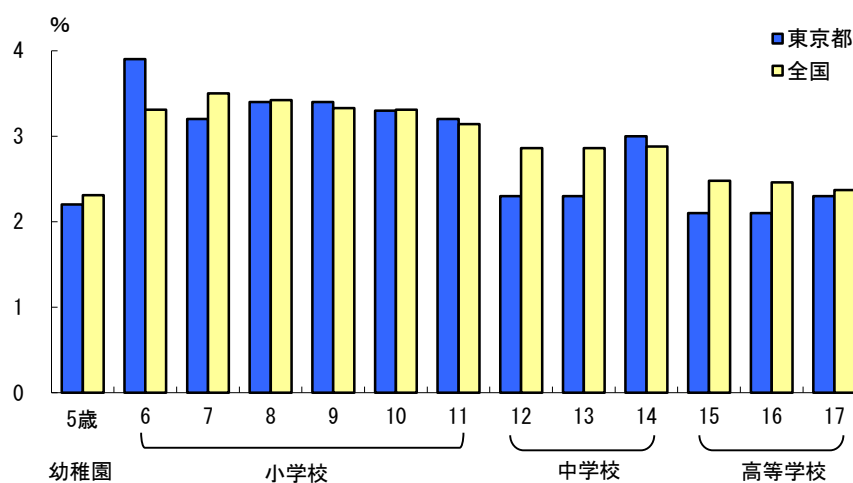
### ⑤ アトピー性皮膚炎

ア 年齢別に「アトピー性皮膚炎」の者の割合をみると、5歳、12歳、13歳及び15歳から17歳を除く各年齢で3%を超えている。「アトピー性皮膚炎」の者の割合が最も高い年齢は、6歳で3.9%となっている。

イ 全国値と比較すると6歳、9歳、11歳及び14歳を除く各年齢で「アトピー性皮膚炎」の者の割合は、全国値より低くなっている。全国値と最も差がある年齢は、6歳で0.6ポイント全国値より高く、12歳及び13歳で0.6ポイント全国値より低くなっている。

(図9、統計表第4-1表、参考表)

図9 アトピー性皮膚炎の者の割合の比較



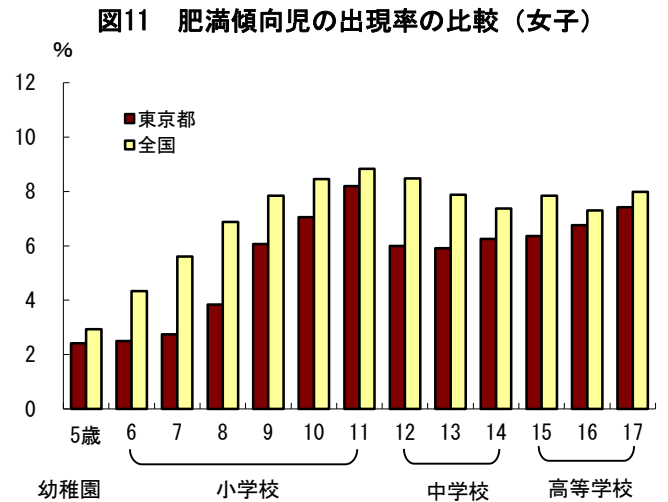
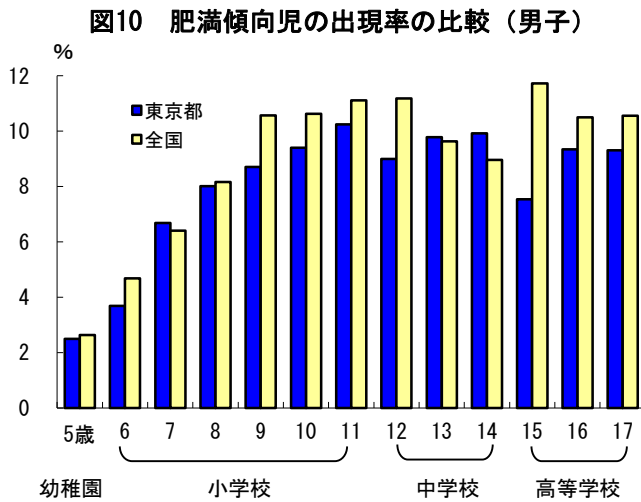


### 3 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

#### (1) 肥満傾向児の出現率

- ① 年齢別に肥満傾向児の出現率をみると、出現率が最も高い年齢は、男子は11歳で10.25%、女子は11歳で8.20%となっている。
- ② 全国値と比較すると、男子は7歳、13歳及び14歳を除く各年齢で、女子はすべての年齢で全国値より低くなっている。

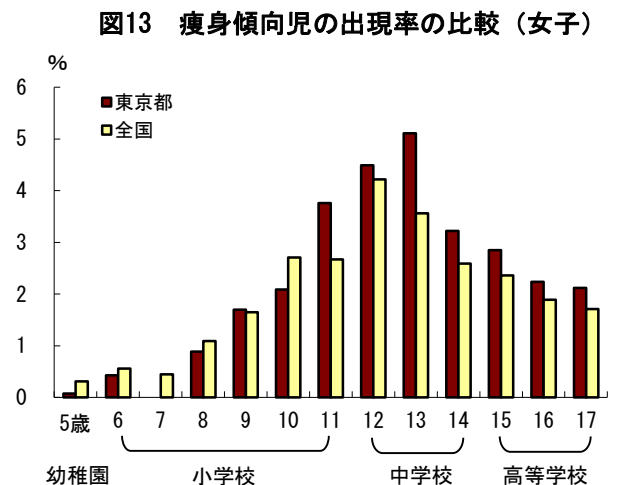
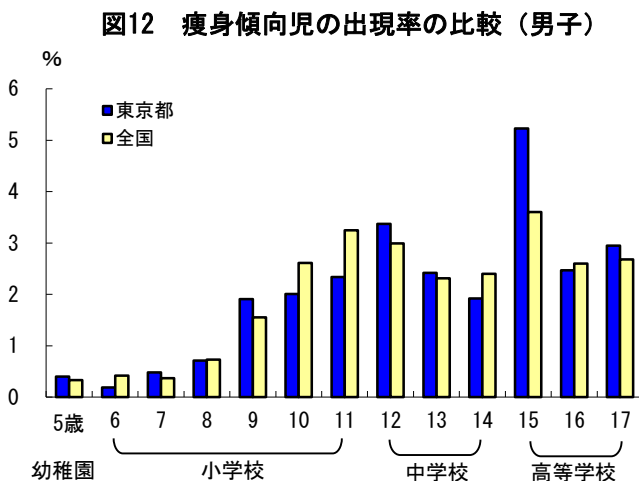
(図10、11、統計表第6表)



#### (2) 痩身傾向児の出現率

- ① 年齢別に痩身傾向児の出現率をみると、出現率が最も高い年齢は、男子は15歳で5.23%、女子は13歳で5.11%となっている。
- ② 全国値と比較すると、男子は6歳、8歳、10歳、11歳、14歳及び16歳を除く各年齢で、女子は5歳から8歳及び10歳を除く各年齢で全国値より高くなっている。

(図12、13、統計表第7表)



[肥満・痩身傾向児の算出方法について]

性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を算出し、肥満度が20%以上の者を肥満傾向児、-20%以下の者を痩身傾向児としている。

算式は以下のとおりである。

$$\text{肥満度} = [\text{実測体重(kg)} - \text{身長別標準体重(kg)}] / \text{身長別標準体重(kg)} \times 100 (\%)$$

※ 身長別標準体重の求め方

$$\text{身長別標準体重(kg)} = a \times \text{実測身長(cm)} - b$$

年齢	係数	男子		女子	
		a	b	a	b
5		0.386	23.699	0.377	22.750
6		0.461	32.382	0.458	32.079
7		0.513	38.878	0.508	38.367
8		0.592	48.804	0.561	45.006
9		0.687	61.390	0.652	56.992
10		0.752	70.461	0.730	68.091
11		0.782	75.106	0.803	78.846
12		0.783	75.642	0.796	76.934
13		0.815	81.348	0.655	54.234
14		0.832	83.695	0.594	43.264
15		0.766	70.989	0.560	37.002
16		0.656	51.822	0.578	39.057
17		0.672	53.642	0.598	42.339

出典:公益財団法人日本学校保健会「児童生徒等の健康診断マニュアル(平成27年度改訂版)」